

人文系博物館における資料ドキュメンテーションの諸問題

八重樫 純 樹*

本論は人文系博物館における資料情報のドキュメンテーション諸問題に関する問題抽出をおこない、今後のあり方に関して考察を行うものである。内容としては1章では本論の動機と目的について、2章では図書館等の資料管理機関・分野の中で資料情報を比較する。3章では関連機関の状況ならびに活動概要と歴史的資料の特性を示し、4章でこれらの諸問題を抽出・整理し、今後の方法視点について考察する。5章は本論全体のまとめと今後の方法論について2つの側面から論じる。

キーワード：人文学系、博物館、資料、ドキュメンテーション、美術史、歴史学、考古学、民俗学、史料

1. はじめに

社会的技術基盤の進展はここ10年間に於いて加速度的に進展した。情報化時代の語はすでにニュース等の見出しにならなくなり、日々、世界に張り巡らされたインターネットに関係する具体的ニュースに出会う。そしてルーブル博物館、オルセー美術館等のメディアによる仮想空間もコンピュータ画面で容易に見る事が可能である。確かに技術は進み、普及した。

人文学系分野におけるコンピュータ利用の試みは欧米において既に20数年、国内においても国立民族学博物館をはじめ、国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館等で本格的に開始され、既に10数年以上が経過した。この間、上記のように社会技術基盤の整備が進展し、この事は人文学系資料に関わる諸研究分野、機関も例に漏れず、現在各所でデータベースの公開、研究の新たな展開、文化庁等における大規模情報化事業等が行われつつある。

また、人文学系資料に関わる文系大学・大学院の学術研究・教育等においても文系情報関連新規学科の設置、そして既存学科における正式カリキュラムに情報の課題が取り込まれ、各種問題を抱えながらも遂行されている状況である。

しかし、人文学系資料に関わる分野において、情報の課題は、技術スキルの課題もさることながら、解決すべきいくつかの基本的問題が存在している。この問題は人文学系資料に関わる分野の特性的基礎問題であるのか、あるいは社会一般分野に共通する問題である

のか、それにより問題の一般化と解決・整理の方法は異なつてこよう。本論では、これら人文学系博物館資料の情報化あるいは情報コンテンツ形成の立場から、諸問題を抽出・整理し、今後の方向性について考察を試みるものである。

2. 博物館・美術館・図書館の資料

博物館、美術館、図書館ともに社会的存在としては知識あるいは情報伝達メディアとしての資料を収集・管理・保存・利用の業務を遂行し、その資料の在り方に関する研究(博物館学、図書館学等)を行っている。これらはそれぞれの歴史的経緯を含めた分野としての社会的特性があり、資料もそれぞれ特性がある。さらに、各分野機関であつかわれる資料の研究が背景として存在している(地学、生物学、考古学、歴史学、人類学、美術史学、美学、芸術学、文書学等)ここでは主に、あつかわれている資料をもとに考えてみる。

2.1 博物館資料

博物館は字体の通り、基本的に博物資料を扱う機関であり、そのまま考えれば、自然、ヒト社会に存在するあらゆる資料を対象に上記機能を遂行する多岐分野に渡る機関といえる。これらの資料を概括すると、ヒトの生活・社会・空間、そして歴史時代も含むが文字記述の存在しない、自然史資料、原初時期資料等、“もの”としての資料が基本である。つまり、ヒトの記録情報が存在しない資料、しかし往時の痕跡を伝達する情報メディアとして考えざるを得ない“もの”としての資料群が基本である。

博物館は基本的に自然史系と歴史系博物館に大別されるが、自然史系資料は再現可能な場合も多いが、歴史系資料は再現不能である。但し、博物とはガラクタの寄せ集め、あるいはゴミ捨て場ともなりかねない。

* やえがし じゅんき 静岡大学情報学部

〒432 静岡県浜松市城北3-5-1

Tel. 053-478-1555

(原稿受領 1997.12.10)

博物館学芸員は資料の社会的存在・価値として認識し、その社会的利用・保存・管理が業務の基本である。収集資料に標本性、代表的価値性を内在する情報メディアとしての認識力が必要となる。

分野、機関等によっても事情は異なるが、資料の情報記録・管理（ドキュメンテーション：Documentation）に関しては、国内においては基本的に統一的規格、規則が存在していない。

2.2 美術館資料

“美”として認識され、社会的に保存と管理が必要とされる資料が基本的対象である。美は時としてそれぞれの時代社会の経済的価値と結合する場合も多い（宝物群）。また、美は外的ダメージ（損耗、外傷、劣化等）により、その意味と価値が変質する場合も少なくない（博物館資料も同様であるが）。

また、これらの多くは、自然造形資料はともかく、歴史時代の社会生活空間でヒトにより製作された“もの”が多く、製作者が明確な場合が多い。さらに、一般的に製作者は時の芸術家であり、内容はともかく情報記録はなされている。但し、特に歴史的経緯のある資料は、その情報記録および美術資料自体、上記のように、経済的価値と結び付けられるので、人為的雑音の多い空間を経ている（つまり、偽物、複製、贋物、補修、その他）。ここに、美術館資料の意味がある。

資料のドキュメンテーションに関しては、博物館に類似するが、西洋美術との関係も歴史的に深く、かつ有限の範囲の資料であり、また、大半は歴史時代に製作された資料であり、可能性そして記録・管理の研究活動は活発に進められつつある（アート・ドキュメンテーション研究会）。

2.3 図書館資料

基本的に歴史時代以降のヒトの社会生活空間において、ヒトが記録した資料を対象としている。“本”として、知識、認識の体系あるいは集成を記述・記録した資料で、その内容は現在社会で有効に活用されている（生きている）対象である。

現代的に生産されつつあるものも多く存在し、かつ利用されており、資料に関する社会的認識および意味については上記2.1、2.2における資料群とは比較にならないほど情報インフラが進んでいる。基本的に文字記述資料そのものであり、かつ、一つ一つの資料が体系として整理された内容を有している。

ドキュメンテーションに関しては、上記由来から、一番歴史的由来を有し、国際、国内規格が存在し、その事自体も図書館業務の要ともなっており、上記2.1、2.2の機関とは比較にならない程整備されている。

3. 人文系博物館と関連機関、関連分野資料の情報

先にも示したが、博物館はまさに博物資料が対象であり、ヒトが認識する世界すべての資料が対象である。しかし、基本的に自然誌（史）系分野と人文系分野に大別できるが、人文系といえ、写真博物館、生活博物館、その他、現代社会・生活・文化空間をベースとした博物館も多く存在する。さらに、美術館も歴史性資料が多い。ここでは主として国内における歴史性資料分野を対象に人文系博物館の考察を進める。

3.1 人文系博物館の主な関連機関

人文系資料の収集・調査・管理を主として行っている専門機関としては、主に以下の関連機関が存在する。これらは、国内の高度経済成長期に符合し、計画され、主に1950年代以降、急速に設置された。

(a) 文書館

行政文書等の管理・公開を主な業務としており、すべての都道府県、あるいは市町村単位に設立されているわけではないが。前記地域単位の範囲の行政あるいは歴史的な文書（主に近世文書から近・現代文書）を収集・調査・管理・公開している。

国の機関としては国立公文書館、国文学研究資料館（史料館）があり、アーカイブズ（Archives）論の研究と、アーキビスト（Archivist）の育成を中心に活発な活動を展開している（文献1,2）。歴史学（特に近世史、近現代史）との関係がきわめて強い。

(b) 歴史民俗資料館

主として、地域における歴史資料、古美術資料、民俗資料、場合によっては考古資料の収集・管理・展示等を主な業務としている。これも全国すべてではないが、市町村単位に設立されており、管轄は主に市町村の教育委員会である。

かつての郷土資料館そして博物館そのものの性格が強い。しかし、法的に学芸員資格保有者の配置が義務付けられておらず、国内では設置館数は比較的多い。学芸員が配置されていない機関が多く、資料管理等に多くの問題を含んでいる。文化庁の補助事業で全国に多数設置されたが、現在、資料管理・運営等に多くの問題を残している。国の機関としては、管轄と性格（研究博物館）は異なるが、国立歴史民俗博物館がある。

(c) 埋蔵文化財センター

文化財保護法の制定以来、全国の自治体に専門機関として設置された。考古資料の発掘調査、遺跡・遺構・発掘資料の分析整理、調査報告書の刊行、発掘資料の保存・管理を業務としている。

都道府県単位、調査等の多い自治体では市町村単位

にそれぞれの役割分担で上記業務を遂行している。また、管轄は主に自治体の教育委員会であるが、自治体直轄機関の他、最近では財団として活動している機関が多い。現在、全国で約100機関。人文系資料関連機関としては数も多く、かつ活発に活動している。しかし、膨大な累積資料情報化の問題をかかえている。

(d) 風土記の丘

古墳および古代寺院等の史跡全体の環境、資料等を保存し、史跡公園をめざし、整備を進めた機関である。主に、都道府県自治体で管理し、業務を遂行している。

上記(a)~(c)とは、多少ニュアンスが異なり、付属の資料館では、史跡に関連する歴史、考古、民俗関係資料の保存・管理・公開展示等業務を遂行しているが、歴史公園として、入園者向けの一般入門的性格を有している。全国で9機関存在している。

(e) その他

国文学研究資料館では、古代からの国文学資料の収集、分析・研究、管理・利用に関する業務・研究を国文学研究者が遂行している。付属の史料館では、(a)で述べた活動を推進している。

東京大学史料編さん所では古代から近世にいたる歴史文書(もんじょ)の史料収集、分析・研究、編さんを歴史研究者を中心に遂行し、史料等の保存・管理・修復等の研究と技術普及活動を推進している。

民族学博物館では、世界の民族に関する調査研究を遂行するとともに、資料の収集・管理・展示活動を研究成果公開の一貫として遂行している。また、資料の情報管理も、国の機関としては、先進的役割を果たしている。

最近、東京大学、京都大学等でユニバーシティミュージアムを設置・推進しており、今後、多くの大学に普及してゆくものと思われる。

3.2 資料の多様性とその特質、背景の研究分野

人文学博物館資料はきわめて多様であり、そのバックグラウンドにそれぞれの対象毎に研究諸分野が存在する。つまり、

- ・史料としての文献あるいは文書(もんじょ)資料、また金石文資料に関しては、歴史学。
- ・地下埋蔵されていた発掘資料に関しては考古学。
- ・伝承、習俗、伝統芸能等に関しては民俗学。
- ・絵画、彫刻、工芸資料に関しては美術史学。
- ・歴史的建造物に関しては建築史学。
- ・その他

これら資料群は、自然史系資料と異なり、ヒトの生活、社会、技術、文化等との関わりとしての痕跡である。このマクロなサイクルを考えると、共通していえることは、以下の3空間としてモデル化が可能である。

(a) 事象空間

殆どの資料はある時点で何らかの目的で製作・利用され、棄却あるいは廃物として捨てられ(あるものは、何らかの目的で保管されてきた)。

(b) 経緯空間

その後、何らかの環境下で、長い時間経緯してきた。ここはきわめて強烈な雑音空間である。

(c) 現在の空間

そして、現在時点で、何らかの操作(発掘、調査等)で、博物館資料として認識され、保存・利用される“もの”である。

これら概念と資料の関係を、図1に示す。

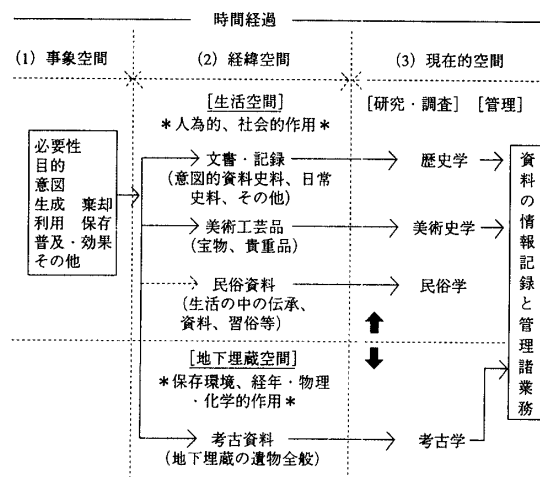


図1 資料の発生から現在までの作用意味

4. 資料ドキュメンテーションの問題と方向性

4.1 人文学資料情報記録の基本問題

日本における人文系博物館の資料ドキュメンテーションの問題は、個々の機関では必要性、記録可能性(要員、資料の限定、その他)に応じてそれなりに存在している。しかし、すでに100年以上の歴史を経ている博物館の世界であるが、全体的な規格あるいは標準化という意味では、殆どまとまりをみせておらず、その活動動向も、歴史的に散発的であり、依然端緒すらみつからないといっても過言ではないであろう。この状況は自然史系博物館も大きな差はない。

これら博物館資料のドキュメンテーションについては、常に分類の検討からはじまる。この“分類”が大きな問題である。情報記録の伝統的歴史を有する図書館分野、アーカイブズ分野、そして自然史系では比較的自然に論議が進められやすいとは思えるが、人文学系資料はその範疇に入りにくい。これは基本的に以下によるものと思われる。

(a) 専門家と資料認識の問題

“もの”資料には文字記録がないものが大半であり、その情報認識は専門家の解釈である。専門家の解釈はその個人の世界観と知識ベース・経験に依存せざるをえない。解釈は研究的側面と資料管理等、社会的客体化の側面がある。専門家はどうしても研究面を重視し、その論を重んじる。従って、分類の論議は多数になるほど、また多分野に広がるほど発散しやすい。

(b) 情報多様性の問題

資料はヒトの物質面、精神面における生活、社会、文化等行動と活動の痕跡である。そもそもヒトの活動・精神のすべてを分類可能であるものかどうか。ヒトの多様性の一元化は不能ではないか。上記分類も一元化をめざすため、途中で矛盾をきたし、発散の大きな要因となる。多元的に考えるしか方法はない。

(c) 専門領域の局所化問題等

専門を深めるほど、視点領域が狭くなるのはすべての分野に言える事である。現状の人文系専門は多岐に渡り専門分野が分かれている。それぞれの専門分野では、扱う資料に関する資料論がそれぞれ専門家毎に存在しているが、同じ基盤で論じられる事は少ない。

その他いくつか上げられるが、基本的に上記(a)~(c)から派生する。研究的側面はともかくとして、人文学資料の社会的客体化の視点から、考古学、歴史学、民

俗学、美術史学、建築史学、民族学、国文学等資料の社会的客体化、つまり資料情報管理としての側面から考え、議論する必要がある。

4.2 ライフサイクルからみた資料の情報

前述の諸問題は、歴史と伝統を有し、かつ日々研究を推進している人文学系で至急に解決できる問題とは思えない。ここで、図1で示したように、あくまでも資料の発生と棄却、そして現在にいたる過程に着目し、マクロな視点から考えてみる。

(a) 事象情報空間としてのモデリング

図1からも明白であるが、すべての資料は基本的に、ある地理的空間と時間の上で発生し、ほとんどの資料が消滅するきわめて強い雑音空間(ヒトの作用(破壊、修理、模造、変造等)、社会的作用(火事、戦争等)、あるいは自然的作用(物理的(災害等)、化学的(腐食等))を経て、現在に至る。残った資料の多くは雑音の影響を色濃く残し、変質、変形しているものが多い。

このヒトの活動と資料の発生、経緯、消滅、伝達等空間をN次元の幾何学空間に近似し、地理的空間-時間を共通平面として捉え、並列な3次元空間に単純化し、資料の存在をマクロに記述可能にしたモデルを図2に示す。資料および資料分野相互の情報相関をマクロに把握する事に有効である(文献3),4),14)。

(b) データーコンピュータの基本構造

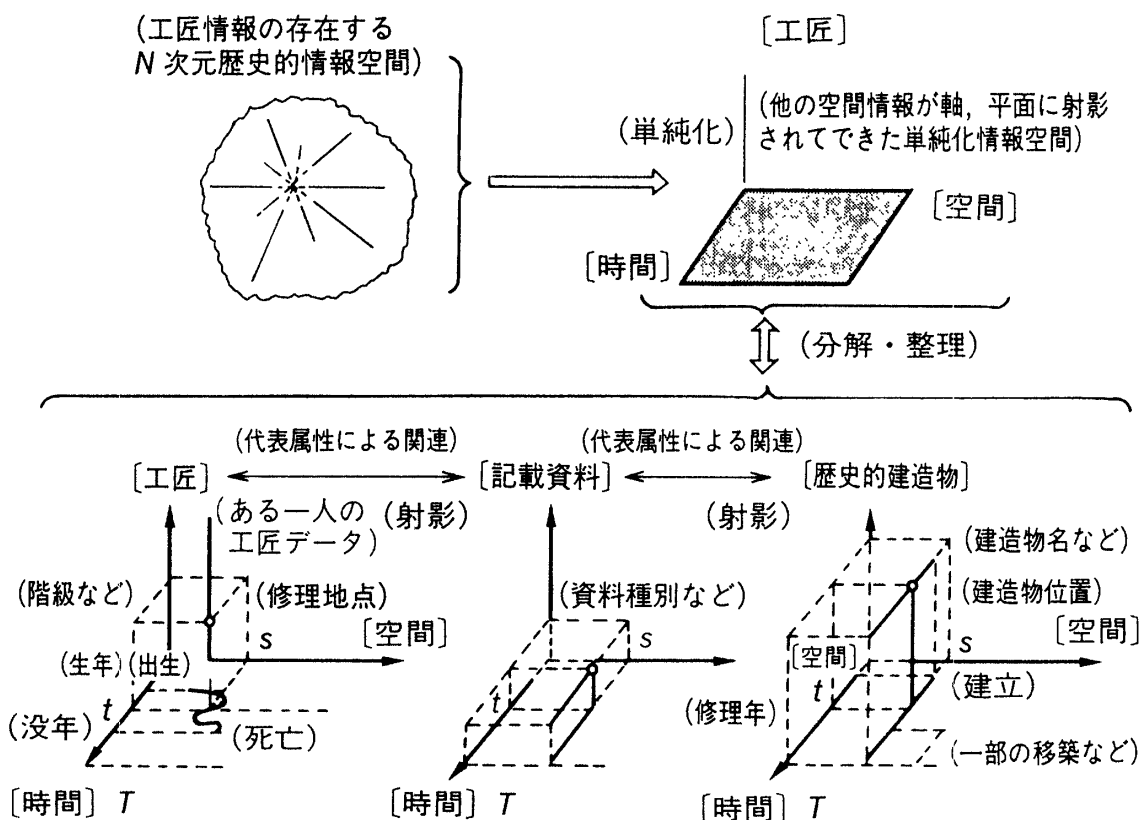
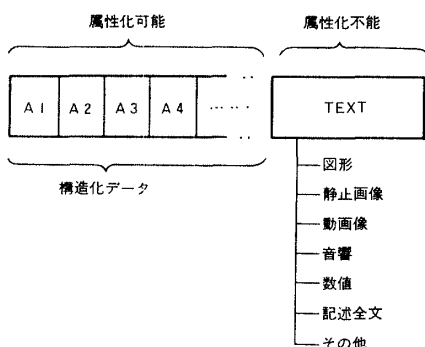


図2 建造物を例とした事象情報空間モデル(文献14)より引用)

前記(a)から、すべての資料は意味の比重の差はあれ、地理的空間と時間情報を含む。そして、資料の現在的・社会的・学術の意味は、姿形、音、数値あるいはテキストそのものである。この観点から、資料のコンピュータ可読データとしては、図3のように一般化可能である。これらから、データ制御可能な一般的コンピュータ機能モデルとしては(文献5)、

- ・データベースシステムとGISシステムの融合性。
- ・データベースシステムはマルチメディア対応である事。
- ・さらにテキスト処理可能である事。



〈歴史系データ〉 = 〈地理的空間〉〈時間〉〈対象内容〉〈隣接情報〉
 地理的空間：資料や事象などの所在、出現、移動等の地理的な属性情報
 時間：出現等の時間的な属性情報
 対象内容：それがどういふものであるか(図1のTEXT部に多くはいる)
 隣接情報：資料、事象等の関連情報で、参考文献、所在、管理、現状等の情報

図3 歴史系資料データの一般的構造 (文献5,14)より引用)

(c) 資料調査・分析過程の業務サイクル

情報コンテンツとしてのデータベースは基本的に、図1における現在の空間の中で形成・利用される。本課題のドキュメントの問題の位置づけおよびコンテンツ利用の問題がある。これは、日常業務の中で、連続的、体系的に作成され、かつ、日常業務で利用されねば意味がない。

この観点から、現在の空間における、人文学系資料に関する資料の業務サイクルについて比較・分析すると、図4のように示す事が可能である。考古学、民族学、歴史学資料はサイクルとしてきわめて類似している。このサイクルにおける業務区分でドキュメントの内容、質が異なる。ここにドキュメンテーションの業務を位置づけるべきであろう(文献15,17)。

5. まとめ

人文学系博物館における資料ドキュメンテーションの課題は、基本的に以下の二つの側面が考えられる。

5.1 資料多様性認識の問題

特に2章、3章、4章で示したように、文字記録が少ない資料情報はあくまでも専門家の認識と解釈に頼らざるをえない。そして、専門家は個々独立に、それぞれの研究を遂行し、基本的に研究の一環としての資料解釈である。ここが人文学の本質でもあるが、資料はやはり社会的存在として意味がある。特に情報化時代を迎えた現在、その意味はますます重くなる。

人文学系博物館ドキュメンテーションの課題は資料認識の課題と同義でもあり、研究の側面抜きには考え

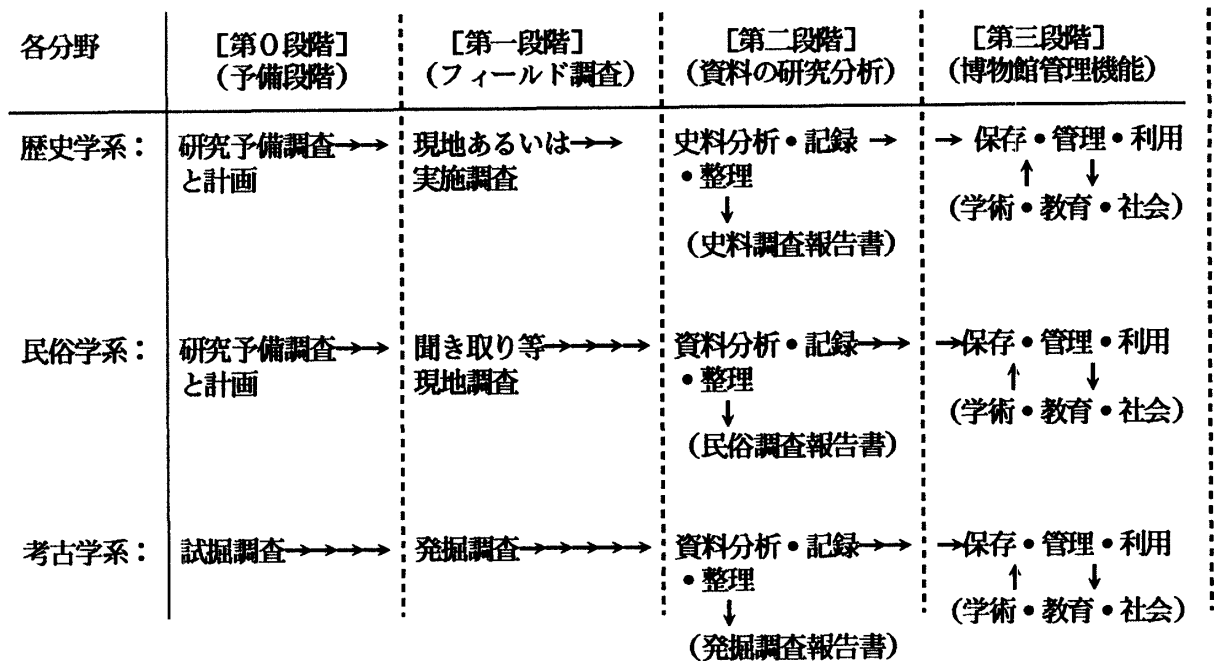


図4 人文学関連分野の資料調査過程の類似性

られない。しかし、これらを社会的存在を軸とした社会的客体化の視点と方法で見直す必要があるのではなからうか。つまり、学説はともあれ、資料の現在の存在、そして資料のごく一般的な出自、材質、構造、経緯等、無機的部分にまず、基本として、着目せざるを得ないであろう。往時における資料用途に関する一元的な定義は研究あるいは世界観そのものであり、議論発散の基本要因でもある。ここは、多元的な方法が必須である（マトリックス方法あるいはシソーラス・辞書の整備等）。

また、資料ドキュメントの目的・用途の問題がある。博物館資料そのものは研究、管理、運営、教育、普及等、多目的な存在である。一般に、この多目的性を同時に解決可能なドキュメンテーション方法を指向するが、これが発散そして後々の矛盾を抱える要因ともなる。基本的には資料管理を軸に、博物館全体と資料の業務・目的を部分化し、業務として記述可能な範囲におさえて、全体を構造化する方法しかない。これは一般のOA技術の応用であるが、このための前提として伝統的な博物館業務の抜本的見直しが必要である。コンピュータ以前の文書管理のシステムを設定すべきであろう。

5.2 情報コンテンツ形成と利用の日常化

さらに重要なのは、これらドキュメンテーションとドキュメント形成・利用の日常化である。図書館等はすでに業務の一部であるが、人文系博物館の多くはまだ、そこにいたってない。日本の人文系博物館あるいは人文学系研究諸分野は、最近10年程は分野により活発化しているが、歴史的にもこの問題を正面から取り組んだ形跡が見あたらない。図書資料と異なり、資料の社会的利用度の問題も背景には存在する。

しかし、情報化時代を迎えた現在、さらに今後において、それではすまされない問題を含んでいる。4章でも示したが、個々の専門家、あるいは特定分野では資料論が存在するが、全体としては存在していない。アーカイブズ論、図書館ドキュメンテーション論等すでに実績のある分野を参考に、資料の社会的客体化の視点から、資料ドキュメンテーションと資料客体論（資料論）を融合した資料情報学の設定と確立が急務であろう。

参 考 文 献

1) 安澤秀一：『史料館・文書館学への道—記録・文書をど

う残すか—』吉川弘文館 1985

- 2) 大藤修, 安藤正人：『史料保存と文書館学』吉川弘文館 1986
- 3) 八重樫純樹：「歴史系支援情報処理の研究」情報処理学科, 情報学研資, 1-4 1987
- 4) 八重樫純樹：「歴史的データの基本構造に関する研究—地理空間データを中心として—」1989年 情報学シンポジウム論文集 pp.115-124 1989
- 5) 八重樫純樹(編, 著)：『国立歴史民俗博物館研究報告第30集 共同研究「歴史系研究支援情報処理の研究—画像データを中心にして—」』国立歴史民俗博物館 1991
- 6) 八重樫純樹(編, 著)：『国立歴史民俗博物館研究報告第37集—土偶とその情報—』国立歴史民俗博物館 1992
- 7) 八重樫純樹：「資料の視覚情報化」『科学の目でみる文化財』国立歴史民俗博物館編 (株)アグネ pp.122-149 1993
- 8) 八重樫純樹(編, 著)：『国立歴史民俗博物館研究報告第53集 共同研究「歴史系研究支援情報処理の研究—カタチの情報のデータ形成・索引法—」』国立歴史民俗博物館 1993
- 9) 波多野宏之：『画像ドキュメンテーションの世界』勁草書房 1993
- 10) 八重樫純樹：「土偶情報化研究と歴史的資料情報の問題」1994年情報学シンポジウム論文集 pp.39-50 1994
- 11) 八重樫純樹(編, 著)：『平成3～5年度, 文部省科学研究費補助金総合研究(A)「土偶データをもととした考古学学術データの形成・利用・流通に関する総合研究」研究報告書(課題番号 03301050, 代表 八重樫純樹)』1994
- 12) Jyunki Yaegashi : 「An Experimental Study on Organization of Information Resources of Archeological Materials (remains), taking as an Example of Clay Figurines of JOMON period in Japan」47th FID Conference and Congress pp.760-764 1994
- 13) 八重樫純樹：「“もの” 資料データベースとドキュメンテーション」第一回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム報告書 pp.43-52 1995
- 14) 八重樫純樹：「歴史情報」情報処理ハンドブック pp.887-891 1995
- 15) 八重樫純樹, 高井健司, 千野祐道, 宮原健吾：「福岡県における歴史系史料情報化の研究」Museum Kyushu 誌 通巻第54号 pp.37-55 1996
- 16) 福田博同, 五十殿利治：「美術シソーラスデータベース形成の諸問題」アートドキュメンテーション研究 No.6 pp.3-22 1997
- 17) S.A.ホルム(著) 田窪直規(訳)：『博物館ドキュメンテーション入門』勁草書房 1997

Special feature : Museum Documentation II. Some Problems on Objects Documentation at the Museum of Humanities Group, Jyunki YAEGASHI (Dep. of Information, Shizuoka University (5-1, Jyohoku 3, Hamamatsu-shi, Shizuoka 432))